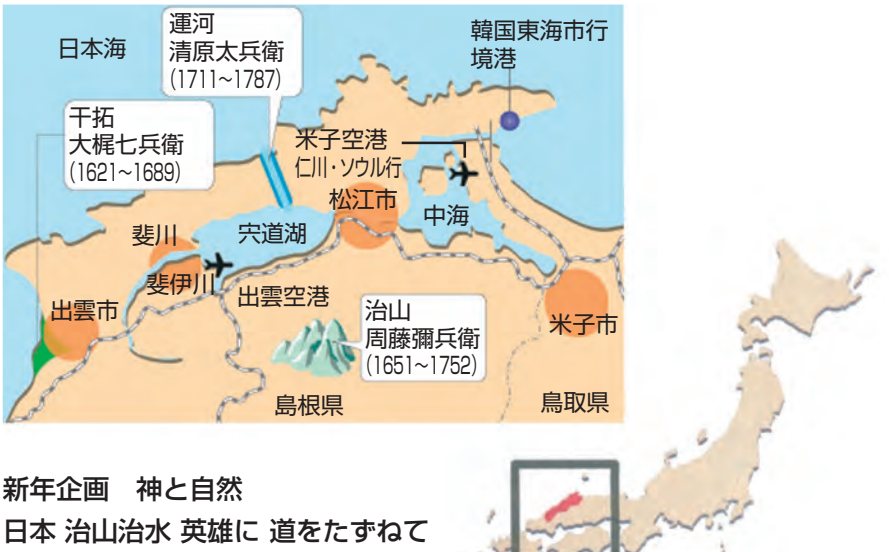


42 年間 金づち一つで川の流れをかえる

周藤彌兵衛



新年企画 神と自然
日本 治山治水 英雄に 道をたずねて

記事掲載順

- ①全財産をかけ干拓作業 大梶七兵衛
- ②命をかけて8kmの運河をつくる 清原太兵衛
- ③42年間金づち一つで川の流れをかえる 周藤彌兵衛



周藤彌兵衛 銅像



天狗山

出雲(日本)＝記事 全正熙記者、
写真 尹汝弘専任記者

「人間は知恵を使って大自然といっしょに生きて行かなければならない。自然を相手に悪い事を企てて害になればそれが災いだ」

周藤彌兵衛(1651―1752)。42年の間、槌とのみだけで山を切開して川の流れを変え、洪水被害から農民を救った日本松江藩の官吏。彼は 1705 年 1 月のある日、治水工事を控えて、息子勘六を呼んでこのように言う。江戸時代、世襲の下郡の家柄に過ぎない低い位の彼は、祖父が失敗した歴史に跳び込んだのだ。50 代半ばの彼は息子に、「山を移して川を変える」という無謀な夢を話した。

息子は精霊崇拝をする村の人々の指弾（つまはじき）が恐ろしかった。亀の首のような形をしていた剣山（つるぎ山）にまつられていた竜神を畏れない父を心配した。彌兵衛は亀の頭の前で蛇行する川を、直線化しようと考えた。それには、首部分を切開しなければならぬ。頭部分に鎮座する神社の反対は、火を見るよりも明らかだった。

先月 23 日に訪れた松江市の日吉切通し(山などを切った道路や水路)には、美しい谷が目の前に広がっていた。水泳や釣り、またはリフティングをしても良い、素晴らしい谷だった。

この切通しは、治山治水のために開発者がどんな姿勢を持つべきかを示している、開発哲学の遺産が込められた所だ。周藤彌兵衛顕

彰会の石原茂会長（82）の話。

「彼は村の豪農でした。権力者ではないが、地方の末端の公職者として楽に一生を終えることができたんです。ところが彼の胸の中には、梅雨や台風が来たといえは家と農地が押し流される農民の現実を、なんとしても克服したいという意志がありました。のみと槌で山を切り開くということを、当時、誰ができると考えたでしょう。彼は農民のために家族と財産をすべて捧げた人です」

川筋は剣山に沿って瓶の首「つ」の形を描く、台風でも来れば人命被害と農地流失、山を貫き岸壁を切り開いて、堤防築造に挑戦

彌兵衛の生まれた所は、前回掲載した大梶七兵衛、清原太兵衛とは違い山村に近い。険しい山の間につくられた田畑で食べる村が、意宇川を中心に点々と 70 箇所余りあった。意宇川は天狗山を源流として中海に流れ込む長さ 20Km の川だ。

この川は、日吉村の剣山の岩壁に当たり「つ」模様で迂回して流れる。普段は、いろいろなところの水を集めて、村ごとに豊かな農業用水を供給する乳腺の役目をした。

1702 年 8 月、出雲地方に台風が近づいた。あつという間に川の水かさが増え、河口に押し寄せる満潮まで重なり、日吉村周辺の堤防が崩れた。何よりも水の流れが、瓶の首のような剣山に当たり、抜ける所を失ったことが原因だった。数百人が死んで、家 4000 軒が失われた。田は砂と泥で覆われた。翌年も同

じだった。彌兵衛はこの時を「希望の光が見えない地獄の様」と言った。松江藩は地平し米（救援米）を送ったが、全く足りなかった。下郡だった彌兵衛はこの大洪水を経験し、どんなことがあっても治山治水をすると決心する。

彼のこのような決心には根拠があった。1650 年代、彼の祖父周藤彌兵衛家正が下郡をした時も 4 回も洪水がおこり、村が荒廃した。この時、家正は意宇川の流れを変えることだけが生き延びる方法だと確信した。

小説「周藤彌兵衛」の著者、交易場修氏は「彼の祖父は村会議を召集して『日吉水路工事』を請願したという記録がある」と、「1650 年、藩の支援を受けた家正は 3 年間にわたって土木工事を始めた」と話した。

この時、剣山の亀の首の、第 1 次切開が行われた。高さとは幅はそれぞれ 12.7m、長さ 29m に至る難工事だった。剣山は硬い花崗岩（花崗閃緑岩）なので、藩の大規模支援があっても 3 年もかかった。

しかし喜びもつかの間、1654 年の洪水に、直線化した堤防はあつという間に崩れた。12.7m の狭い幅の切通しでは力不足だった。農地が 2.5 倍も増えたと喜んでいた農民は、竜神の災いと言って動揺した。以後も 3 回にわたって洪水が襲った。当座の暮らしにも困ったため村の娘たちが売られた。それに土木工事を支援した力強い領主、松平直政（徳川家康の孫）までもが死んだ。

彌兵衛は祖父が残した水路工事計画書だけでは足りないと思い、直接、堤防工事を経験しようといに決めた。ちょうど大阪の大和川で大きな土木工事があることを知り、松江地方から派遣された人夫を引率して大阪に旅立った。1704 年の事だった。

彼はそこで 8 ヶ月にわたって土木技術を詳しく習った後、藩に支援を要請したが、出費がかさんでいた藩は断った。

「ここが彌兵衛の家の跡地です。彼は 1706 年、財産をはたいて工事を始めます。10 年かかるか、30 年かかるか、誰も分らない事でした。村人は「途方もない工事」と、すぐに背を向けたんです。お金をあげて『工事に参加しなさい』と言っても、『祟りがある』とそっぽを向きました」

山本謙氏（人間自然科学研究所理事・市民運動家）は、彌兵衛の執念が泰山を動かしたと言った。彌兵衛は村人がそっぽを向いた中で、他の地方の人 20 人余りと一緒に工事を始めた。祖父が切った岩をさらに切り広げ、新川の堤防を造る工事だった。

彼は工事のために倉の米をみな処分し、賃

金を払った。しかしまた人夫たちも、堤防築造工事のみで、岩を壊して水路を造る事には参加しなかった。竜神の祟りが恐ろしかったからだ。彌兵衛は仕方なく一人で岩に上がって、槌とのみだけで岩を壊した。雪や雨が降っても、一人作業を止めなかった。そうして 3 年、彌兵衛の真心に感服した日吉の村人たちが彼の作業を助け始めた。また、藩の関係者も実態を把握して激励金を出したため、工事に弾みがついた。そして着工してから 5 年、その間放置されていた第 2 次水路工事が完了した。

それでも彌兵衛の槌音は止まらなかった。幅 6m、深さ 1m の拡張では、もっと掘らないと大洪水を十分に防げるとは判断できなかった。すべての農民が帰っても、彼は一人ぼつんと足場の上で岩を壊した。

そして悲劇がおこった。結婚もしてない娘が持病で死んでしまった。人々は竜神の災いだとまたうわさした。62 歳で仏門に入ったのも、そんなうわさを無くしたいという理由からだ。

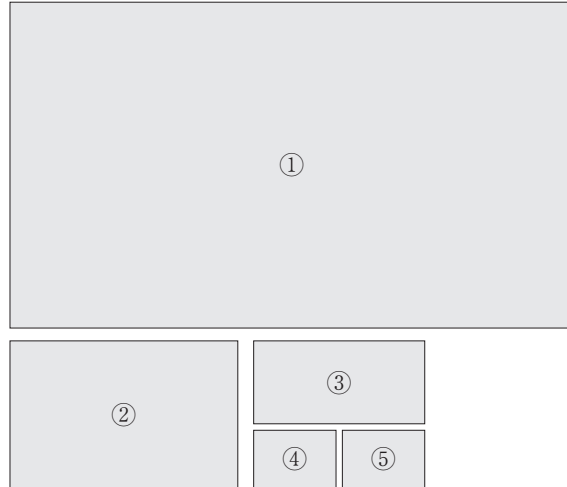
住民は参加、藩は支援拒絶、倉の米全てを処分して人夫の給金に 97 歳の偉大な事業が完工…後世に豊穡の恩恵

いつのまにか、また 10 余年が経った。その間大雨がなく、村は毎年豊作だった。息子は父の健康のために程々にするよう勧めたが、父は聞かなかった。ある日、父を助けるつもりで岩を壊していた息子勘六が突然血を吐いて死んでしまう。傷心の妻も同じ年に寝込んで、再び起きることができなかった。また 3 年後、幼い息子平佐衛門も急死した。代が途絶えてしまったのだ。本当に竜神の災いの様だった。

それなのに白髪の高齢者の槌音は続いた。そして遂に 1747 年、工事が完了した。彼は 97 歳になっていた。海の中に川を掘るような不可能な事が、40 余年の槌打ちの末に完成した。（監注：日吉切通しの幅は上流部で約 27.3 m、下流部で約 21.8 m）

家族を失い、財産を捧げ、人生を捧げた大いなる歴史だった。農民が大自然と共に豊かに暮らすことができるようにしたのだ。堤防の小さな穴に指を入れて洪水を防いだという、オランダの少年英雄ハンスプリンコの老年版のようだ。

先月 26 日午後、関係者たちは取材陣を、切通しからちょっと離れた、ある畑に案内した。畑に韓国産白菜が生き生きと育って



①彌兵衛が 42 年間金づちのみで花崗閃緑岩の間を打ちつけた。今は意宇川が流れている。②周藤彌兵衛顕彰会石原茂会長。③昔の意宇川堤防の一部。④神魂神社。⑤彌兵衛墓地。

いた。その横の一つの小さな丘が目を引いた。1650 年、彌兵衛の祖父が松江藩の支援をもって築造した堤防の一部が、土木遺産になって今も残っていた。松江市歴史資料館整備室関係者は、「現存する堤防遺跡は幅 10m、高さ 3m、長さ 50m で、小さな石を積みでいるもの」と明らかにした。

彌兵衛は 102 歳まで長生きした。彼の家の跡地などは、切通しから 2－3km の範囲内に位置し、遺跡地として後代の生きた教育の場として活用されている。時にはモーゼのようなリーダーシップを発揮し、時には住民との葛藤もあり、天を仰いだ彌兵衛。自然と向かい合った彼の犠牲は、今に至るまで民に豊饒をもたらしてくれている。

エピソード

日本の治山治水の英雄 3 人には共通点がある。第一に隣人のための開発精神、二番目に自己犠牲、三番目に開発によってもたらされる利益を望まないこと、四番目に自然に対する敬意、五番目に社会的合意だ。当時、創造世界の保全のような、生命神学の観点の認識はなかった。

現代の土木技術は 42 年の槌打ちで乗り越えた自然を、たった一日で、ショベルカーを

使って崩すことができる。現代人にとって自然は敬意の対象ではなく、生活の利便性や建設利益のために、いつでも変えることができるという征服的自然観が支配的だ。

しかし、クリスチャンにとって土地は生命を育む「母」だ。したがって、これを虐待する行為は創造秩序に対する挑戦だ。地球温暖化に代表される災いは、この挑戦に対する当たり前の結果かも知れない。

私たちの 4 大江開発事業の可否の判断は、正確さを求めるならば専門家たちの役割だ。全知全能でない我々が母なる河を治めることによる環境工学的結果、社会的価値は一般人には簡単には分からないし、判断することもできないからだ。

セマングム干拓地開発 19 年を通じて分かるように、開発論者と反対論者が押したり引いたりして、先進的な循環ができる結果を生んだ。社会的合意がついたということだ。ところがその最終的な結果はまだ分からない。日本の運河開発事例のように無用の長物になりうる。その一方、治水は干拓のような肯定的効果をもたらすこともできる。

このような観点で見る時、熾烈な論争にもかかわらず、そのまま速いスピードで進む 4 大江開発事業は、プロテスタントの判断のように議論の余地があることは明らかだ。時間

において特定の港湾をまず開発して、生態系を観察するケーススタディが必要だ。聖書の観点で見る時、生態系全体が救援の対象だからだ。

jhjeon@kmib.co.kr

（財）人間自然科学研究所、国民日報趙受済社長に感謝状



国民日報 趙受済（チョミンジェ、写真中央）代表取締役社長が、日本人間自然科学研究所小松昭夫（66・左側）理事長から、自然開発報道に関して感謝状を受けた。

小松理事長は 16 日ソウル・汝矣島の国民日報ビル 11 階で開かれた“国民家族”の水曜礼拝に参加して、趙受済社長に国民日報セクション・イウツ（隣り）が去る 1 月、日本島根半島の治山治水の英雄三人の業績

に対して、「神と自然」という観点で報道してくださったことを光栄に思う」と、感謝状を授与した。授与式には人間自然科学研究所の金顯哲（キムヒョンチョル、78・前放送委員会企画室長）顧問が同席した。

チョ・グッヒョン記者